

上田 亨 先生の思い出

渋谷 進 (11期 1968年卒)

我々11期は薬学部の転換期に在籍することになった珍しい年代である。1学年40名の定員である。次の学年から2学科になり定員は80名になった。医学部の周辺に散らばっていた古い木造の講義室や実験室がようやく一つの建物に集約されつつあった。講義室として使用していたところは以前には結核患者の隔離病棟の一部であったなどという話も聞かされた。

教養部から学部へ移行し、更に卒論実習のため各講座に配属されたのは4年生の時だったと思うが、希望に従って薬化学講座に配属された。元々の薬化学講座は学生定員の増加に伴い、薬学科の薬化学講座(水野義久教授、上田亨助教授)と製薬化学科の薬品有機化学講座(池原森男教授、大塚栄子助教授)に発展していた。無事薬学部を卒業し、特に考えもなくそのまま修士課程に進学し、そのまま薬化学講座に在籍し、上田先生からピリミジンヌクレオシドの化学変換に関する研究テーマをいただいた。すると間もなく修士課程1年の夏休み前に、池原研究室は大学院生を連れて大阪大学薬学部へ移動された。空席となった薬品有機化学講座の教授には上田先生が就任されることになっ

た。上田先生に師事していた大学院生や卒業実習中の4年生は先生と共に薬品有機化学講座に移籍した。薬化学講座は2度目の細胞分裂を経験することになったのである。上田先生はその時40歳未満であったと思う。

移籍した薬品有機化学講座で、上田先生の指導の下に余計なことは考えることもなく修士課程の研究に集中した。1学年下には後に昭和大学薬学部教授に就任される田中博道さんがおられた。私達は上田先生が教授になられて最初の修士の学生であった。修士2年の中頃かと思うが、私の就職先として先生から一つの提案があった。その当時核酸化学関係の研究をされていた民間会社は大きな企業が多く、各企業では薬化学系の先輩方が活躍されていた。修士課程の研究に関連のある事業を行っている企業で、それらの先輩が誰もいない会社の就職試験を受けるのはどうかというものであった。

写真: プリン・ピリミジンと関連化合物に関するゴードン会議に出席中の上田亨教授(1986年7月)。



上田先生はその会社の当時の研究所長から学生の紹介を依頼されていたようである。先生の提案を受けてその企業の就職試験を受けることにした。その当時は教授推薦で就職試験を受ける場合は、社長・重役面接だけであり、特に問題が無ければそのまま内定になるのが通常であった。その会社の研究所で薬学卒業生は私で2人目であった。行先も決まり、その後はまた修士の研究をゆっくり継続することができるようになった。後で解かったことであるが、試験を受けた企業は醤油醸造のかたわら酵母 RNA を酵素で加水分解し、4種の構成成分(NTPs)をそれぞれイオン交換カラムで分離し、それらを利用し原薬類の製造を開始したばかりであった。

無事修士課程を修了し、会社に就職後も上田先生は、民間の小さな研究所にいる私に何かと気を使って下さった。会社の研究所にも何度か訪れ、講演をして下さったりした。その頃から先生は俳句を始められていたようである。後にいただいた句集には銚子や近郊の様子を詠んだ句もいくつか掲載されていた。先生は会社の研究所長とも良好な関係を維持され、私の学位所得や海外留学についてもその道筋を作ってくださいました。学位取得については、会社から論文をまとめるために薬品有機化学講座へ研究生として出向(内地留学)する機会を与えていただいた。(今から考えると鷹揚な会社であった。私の後輩も何人が会社から同じような扱いを受けていたので、その会社の伝統なのか、研究所長の方針なのかとも思う。)

海外留学については8期の金子正勝さんご夫妻にも大変お世話になった。このように私の人生の流れの方向は、上田先生との出会いから始まり、北大時代～海外留学の時に形作られたと思っている。それぞれの段階の岐路には偶然の要素も多少はあるかもしれないが、上田先生の存在が大きく働いたと思っている。大事な時には無理なことはせずとも適切な方向性を出していただいたような気もする。海外留学は上田先生や金子先輩のお世話により、カナダのアルバータ大学化学部(エドモントン市)の M.J.Robins 教授の研究室に決まった。たまたま私のアルバータ大学滞在中に、北大薬学部とアルバータ大学の姉妹学部の話がまとまってアルバータ大学で調印式が行われることになり、上田学部

長(当時)と薬効の宇井先生、生薬の金子先生、更に薬学部事務長を伴い、エドモントンに来られたことがあった。事務長は同じ北大勤務ながら事務関係者はこのような時でなければ、海外出張は考えられないとのことで上田先生の提案で同行されたとのことであった。いろいろなことに気をまわされる先生であった。

エドモントン到着時には、こちらのホスト役の教授と共に飛行場に迎えにいった。公式行事には私は参加しなかったが、空いた時間に先生方を市内や郊外の国立公園に案内した。国立公園ではビーバーダムの撤去に忙しいパーク・レンジャーの方々と雑談したりされていた。日常業務とは異なる時間を持ちゆっくりされていたのではないかと思う(ビーバーダムは多すぎると周辺の森林に害を及ぼすので適宜制御しているとのこと)。食事時には海外出張に慣れない事務長と、入国審査の時には sightseeing の代わりに「斎藤寝具店」と言っていればいいとか、こちらのホスト役の教授の名前のミケティッシュは発音しにくいので「三日亭主」と覚えればいいのか冗談を言い合っていたのも懐かしい思い出である。

このように他人にいろいろ気を配られ、愉快であった先生が重病で札幌大病院に入院されたと聞き、一度見舞いに訪れたことがあった。その時はやや元気で卒業生の手配等で治験中の医薬品も服用されているとの話もあったように思う。彼岸に旅立った時は、まだ現役の教授で還暦前であった。更なるご活躍を期待する人々も多かったと思われるが残念至極な次第である。

注)この写真は、上田亨先生がお書きになった「核酸代謝拮抗剤の開発—ヒッチング博士とエリオン博士の受賞によせて—」、現代化学 1989年1月号に掲載されたものである。米国で開催されたプリン・ペリミジンと関連化合物に関するゴードン会議の際の写真であり、写真中、後列左端がヒッチング博士、前列左から二番目がエリオン博士、前列右端が上田亨先生である。

同窓会 HP: 2023年9月22日公開